

第三十四回 少年の主張鳥取県大会 最優秀賞作品

「キモイ」って何？

倉吉市立東中学校三年 山田颯亮

「キモイ」、すれ違いざまにそうささやいて彼女は通りすぎる。僕の何を理解してそんなことをいうのか。学校で人権学習をして「言葉」について話し合った。しかし僕の心はさめていくばかりだ。なぜ僕は「キモイ」といわれなくてはならないのか。

友だちを見ていると「キモイ」という時の使い方にいろいろあることがわかる。すぐく真面目な言動をしている人に対して「キモイ」と言ってみたり、自分たちのグループとは気の合わない人を見つけては「キモイ」と言う。僕に対しての「キモイ」はどれなんだろう。

僕は生まれつき、重度のアトピー皮膚炎だ。見ての通り顔だけでなく身体のいたる所に炎症があり、幼い頃から神戸、和歌山、高知と病院を転々とした。一か所に一カ月以上滞在して治療することもあり、学校に登校できる日数も少なくなつた自分の身体の変化や病状に苦しみながら、薬を飲んだりつけたりする生活は僕にとって負担が大きかったが、それ以上に久しぶりに学校に行く時の友だちの視線や態度に「拒絶」を感じる辛さも大きくなつていった。小学校三、四年ぐらいになるとさすがに勉強の遅れもひどくなり、だんだんと学校に行きづらくなつていった。教室にいて、かゆみやかゆみから来るイライラと闘いながら心ない「言葉」や「視線」に言い返すことにも疲れ切ってしまったのだ。その頃、僕に向けて口汚くののしつた人に対して、大人は「心の病気なんだから我慢して．．．。」というようなことを言つてその場を収めていた。なんだ「心の病気」って。僕は全く納得できていない．．．未だにだ。そうやって僕は五年生になった。周りか

らのよそよそしい視線の中で、ひとりぼっち、だった。

そんな僕を救ってくれたのは友だちだった。彼は何のためらいもなく話しかけてくれた。家に行き来してゲームをしたり、本当に楽しく遊べたのだ。家族以外に心を通わせる人がいることの楽しさを知ったのだ。まさに自分が「心の病氣」になりかけていた時だったから彼という友だちの存在は大きかった。

ところが六年になりアトピー性白内障にかかってしまった。このアトピーは僕が目まで奪おうとしたのだ。両目ともだったので自分の見ている世界は白くなつてしまった。黒板の字はもちろん、友だちの顔が見分けにくくなるほどで、見えないことのつらさも味わった。まもなく両目とも手術ということになり、学校を休まなくてはいけなくなることを辛いと思った。僕は確実に友だちという時間を楽しいと思いつけていたから。

気付いたことがある。小学生時代のアトピーとの闘いを通して、僕は友だちとの教室で過ごす普通の日々をすごく大切だと思いつつ始めたことだ。僕の周りの友だちがしゃべっていることがおもしろくて、つい笑えたり、授業中に班で話して発表したりという普通のこと僕は今楽しい。僕の周りのみんなも外見だけを見てその違いから、僕をあらゆるさまにかかい、のしる人は減った。ただ少し距離を感じる。その距離は何なのか。その距離をつくっているのは僕ではないのか。僕は明らかにみんなと食生活が違う。・・・というか変えなければ症状は悪化する。給食も食べられない時は弁当を持参する。学習の遅れもある。運動や宿題をやるうと思っても、かゆみで集中できなかつたり、そもそもわからなくて提出できな

かったりもする。そのことを僕はクラスのみんなにちゃんと伝えていない。みんな僕のこんな様子を、なぜなのかな、と思って聞けずにいるに違いない。それなのに「言葉」にしないのは僕を傷つけるのでは、と気を遣ってくれているのではないかという気がしてきたのだ。みんなに言いたい。

「僕は肉類や、乳製品全て、青魚、お菓子類などの食事制限が多いです。家族を巻き込んだ食事制限の生活です。」

でも全て弁当ではなく、みんなとの給食をできるだけだけの範囲で楽しみたいと願っている。先生に言ってもらおうのではなく「誰かこの肉食ってくれる？」と自分で声を発していきたい。それが僕の生き方だから。

五月のスポーツ大会で自分の足の遅さや体力のなさを思い知らされた。あの日から夜走っている。クラスのみんなと声をかけ合ったことでつながりの一部になれたことが、かなりうれしかったから。「キモイ」とつぶやかれたことが吹き飛ばぐらい楽しかったから。

そして、みんなに強く言いたい。僕に対して言いたいことは、僕のことを知った上で悪口でもなんでも、僕の目の前で言ってほしい。そして僕の言い訳や、本音に付き合ってほしい。僕自身がきちんと僕のことを伝えることで、みんなに向き合っていきたい。それでも僕は「キモイ」ですかと、にっこり笑って問いかけたい。